
リアルバウトハイスクールin川神

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルバウトハイスクールin川神

【Nコード】

N3257BA

【作者名】

反省猫

【あらすじ】

川神学園に2人の少年がやってきた。その少年たちが川神学園に新たな風を

運んでくる事をまだ誰も知らない…

この小説は、真剣で私に恋しなさい！×リアルバウトハイスクールのクロスオーバー作品です。キャラ崩壊・残酷な描写苦手な方は、読まない事をおススメします。それでいいよという方だけお読みください。

第0話 『やってきた男たち』（前書き）

勢いとあふれだした欲望のまま書いてしまった……。でも後悔はしてないw

第0話 『やってきた男たち』

??

「…ここか。川神学園と言うのは」

川神学園の校門前にある少年が立っていた。

少年の容姿は、面長で鼻筋のすっきり通った、どちらかと言えば中性的な感じがする美少年。

しかし、何年もかけて焼いたような赤銅色の肌のせいで野性的で精悍な印象が強い。

髪型は伸びたボブカットで髪の色は黒。また、眼光は鋭く、そうだな、

例えて言えば“武士”　そういう雰囲気を感じた15歳の少年である。

??

「…そうだ。そして今日から俺たちの学び舎となる」

褐色肌の少年の隣りには、別の少年が同じく川神学園を見上げている。

その少年の容姿は、ふち無し眼鏡に整った髪形の優等生といったイメージの

美少年だった。

??

「とりあえず、ここにいっても仕方ない、中に入るか…」

??

「そうだな」

そして二人は歩き始める。

褐色肌の少年の名前は、草？
涼馬。

ふち無し眼鏡の少年の名前は、氷室
冬至。

この二人が川神学園に新たな風を運んでくることをまだ誰も知らない……

< 続く >

第0話 『やってきた男たち』（後書き）

作者「という事で、始めました【リアルバウトハイスクール in 川神】」

作者「元々、リアルバウトハイスクールが大好きでよく読んでたのですが、

よく考えたら、この設定で真剣恋いけんじゃね？と思ひまして
今回、欲望のまま見切り発車してしまいました」

作者「という事でこの小説は真剣恋の世界を舞台にこの二人が、風間ファミリーや

その周辺を巻き込みドタバタをやるアクションファンタジー
ものです」

作者「真剣代るときよりR15要素多めで行きたいと思ひます。またキャラもまた崩壊すると思うので

ご了承を」

作者「また今回は、主人公である涼馬と冬至は、現段階で最強ではありません。

修行をして最終的に最強となります。なので普通に怪我もしますし、当たり前どころ悪ければ

死にます」

作者「まあ、相変わらずの駄文ですが、暇つぶしに読んでくれるなら幸いです」

作者「次回は、2人のキャラ設定を書こうと思ひます」

作者「また感想ありましたら送ってくれると励みになりますが、カ
ミソリレター的なものは

ノーサンキューという事で、結構凹みやすい人なんで（-
-）」

作者「という事で、3日に1度更新ですが、よろしくお願いします」

オリキャラ設定その1（前書き）

オリキャラ2人の設定です。それではどうぞ

オリキャラ設定その1

オリジナルキャラクターその？

名前：草？ 涼馬

c v イメージ：岡本 信彦（『とある魔術の禁書目録』アクセラレータ（一方通行役））

身長：180cm

体重：69kg

性格：真面目だが、ぶっきらぼう。細かい事は気にしない。

大切な者に危害が及ぶと静かにキレる。

趣味：音楽 楽器演奏 料理などの家事

好きな物：和食

嫌いな物：チンピラ 外道 母親の料理

武器：仙術気功闘法【神威の拳】・飛天流

容姿：赤銅色の肌と整った面長で鼻筋のすっきり通った、中性的な感じ顔。

目は母親似の鋭い眼光。髪型は黒髪の伸びたボブカット。細マッチョ系。

川神学園1年F組の生徒。幼い頃より東方 流玄に神威の拳を鬼塚 鉄斎から飛天流を習う。

通常一個人に一種類しか持たない神威の神気を、

「天」「月」「炎」「雷」の4種類を持つ。

元々は東京に住んでいたが、鉄心に呼ばれ、川神市に来ることになった。

趣味の音楽と楽器演奏は父親の影響。料理や家事は、母親が壊滅的な為、

仕方なくやってたのだが、やってるうちに趣味とかし今に至る。

名前：氷室 冬至

CVイメージ：羽多野 渉（『乃木坂春香の秘密』（綾瀬 裕人役）

）

身長：175cm

体重：60kg

性格：沈着冷静で頭脳明晰。クールな感じがするが誰にでも優しく基本いい人だが、

外道や卑劣漢な輩には非情になる。

趣味：読書 鍛錬 説教

好きな物：麺類 豆乳

嫌いな物：チンピラ 外道 虫

武器：骨法・仙術気功闘法【神威の拳】

容姿：ふち無し眼鏡に黒髪の整った髪形（黒髪ナチュラルショート）
細マッチョ系。顔は、中性的な感じで真剣恋で言えば京極系な感じ。

涼馬と同じく川神学園1年F組の生徒。涼馬とは生まれた時からの幼馴染。親友にしてライバル。

幼い頃より東方 流玄に神威の拳を毒島 天堂により骨法を習う。

涼馬と同じく複数の神威の神気、「地」「風」「水」「山」の4種類を持つ。

涼馬が、鉄心に呼ばれた際に涼馬のおさえ役兼お目付け役として川神にやってきた。

成績は悪くなくS組でもやっていける実力が、涼馬とつるむほうが面白い為F組になった。

本来ならS組の面々に目の敵にされる所だが、元来の性格により恨まれることもなく

現在に至る。元々鍛えるのが好きな為、それがこうじて色々な鍛錬法を作っては試している。

オリキャラ設定その1（後書き）

作者「オリキャラ設定は今後も新キャラ出てき次第、設定を投稿しようと思っています」

作者「次回から、本格的に真剣恋のメンバーがでてきますのでお楽しみ〜。」

では、また次回お会いしましょう」

第1話 『なんの脈絡もなく好きと言われたがさてどうしたものか』 (前書き)

今回は、涼馬たちと京、大和などの主要人物たちとの出会いの回です。

それではどうぞ！

第1話 『なんの脈絡もなく好きと言われたがさてどうしたものか』

涼馬

「ふああゝゝ。眠い…」

眠そうに目をこする涼馬が呟くと隣の席の京が珍しく話しかけてくる。

京

「いつもより眠そうだね。なんかあったの？」

京が小説を読みながら横目で涼馬の顔を見ると、涼馬の顔が嫌気が指したような表情に変わる。

涼馬

「昨日、寝ようとしたら…うちのクソ親父が電話してきてな。深夜の2時までしゃべってた…」

それを聞いて一瞬呆れた表情を取る京が、

京

「…はあゝ。涼馬は律儀だね。そんなに嫌ならすぐ電話切れればいいのに…」

京のその言葉に涼馬もため息をつき、

涼馬

「はあゝゝ、俺もそう思って15回くらい電話切ったさ」

それを聞いて、京はクスリと笑い、

京

「それはご愁傷様。お互い面倒な親を持つと大変だね…」

涼馬

「ああ、まったくだ」

涼馬は京の言葉に同意するのだった。

それにしてもなぜあの極度の人見知りの京が、出会って間もないこの少年とこういう会話をしているのか

というと、自己紹介のときに遡る。

——回想

涼馬

「草？ 涼馬だ。趣味は音楽鑑賞と楽器演奏だ。一年よろしく頼む」

そう言って、涼馬は簡単に自己紹介をし席に座った。

涼馬の後何人が自己紹介を終え、次の人の番をなった。

大和

「直江 大和。趣味は読書、音楽鑑賞など色々。みんなこれから一年よろしく願います」

そう元気良く挨拶するが、涼馬と冬至には、どうもネコ被ってるようにしか見えない違和感が

してならなかった。

それからまた何人か自己紹介が終わると冬至の番になった。

冬至

「氷室 冬至です。趣味は読書。これから一年よろしく願いします」

冬至がにこやかにそう自己紹介すると一部の女子からキヤーキヤー言い出す。

ビシッ!!

鞭の音がし、クラス全員ビクツとなり、その音を立てた担任の小島梅子教諭が

梅子

「静かにせんか！ バカ者が！」

と怒鳴った。

続いて、男子が終わり、女子の自己紹介の番となった。

自己紹介は順調に進んでいき、ある少女の番となる。

京

「…椎名 京。以上」

そう言って、席についた。

それを見て周りがヒソヒソし出す。

女子生徒 A

「あれが…」

男子生徒 B

「親があ…」

涼馬は周りのヒソヒソ話を聞き、「はあ〜」とため息をつき、

机を蹴っ飛ばす。

ドン！！

一瞬何が起こったのかわからないといった京を含むクラスメイトだったが、

涼馬が怒気を含んだ低い声でクラス全員に

涼馬

「ヒソヒソ話してんじゃね！俺は裏でコソコソ陰口を叩いてるやつらが

物凄く嫌いだな、…おい、そこのお前、今何こそこそ話してた…」

男子生徒 B

「…え？それは…」

涼馬

「なんていった？」

凄みのあり迫力のある表情をした涼馬に睨まれた男子生徒Bは、

男子生徒B

「ひいいい！！！！ 椎名さんの母親が淫売だつて噂があつて！」

涼馬は、それを聞いた瞬間、人も殺せそうな眼差しをしながらクラスメイト達と見て、

涼馬

「それが、椎名自身に関係あるのか？ 親は関係ないだろう。……
なあ？ そうだろう（怒）」

静かに怒る涼馬の雰囲気クラスメイト全員が飲まれ、無言でコク
コクと頷いた。

この日からこのクラスにあるルールが一つ追加された。

【草？ 涼馬を怒らすべからず】というルールが……。

ビシッ！！

梅子

「やりすぎだ！ しかし、その行為は褒めてやる。皆もわかった思
うがこれから一年やっていく

クラスメイトの一人だ。そういう陰口を叩く行為や陰湿ないじめ
をする輩には、

私や学長自ら指導をしてやるのでそのつもりに！」

クラスメイト

「はい！」

こうして京に対するクラスメイトの態度はかなり柔らかくなったが、京自身が人との壁を作っているので、

なかなかクラスに馴染む事が難しかった。

まあ、その事件以降、数は少ないが俺に対して京が話しかけてくるようになった。

それが縁で、幼い頃より一緒だという直江 大和とも知り合いになり、友人となった。

大和と京は「風間ファミリー」という幼馴染のやつらとよくつるんでいる。

京の人見知りもそのせいもありなかなか直らないというのが、大和の話でわかった。

京は大和が好きらしくよくアプローチしているが、大和がそれをすげなく交わし断り続けている。

俺は不思議に思い、大和に理由を訊ねるところ答えが返ってきた。

大和

「俺には京に好かれる資格なんてないんだよ」

それから大和から京と過去の出来事を聞いた。

昔、京は虐められていた。

原因は京の母親。無類の男好きのせいでかなり数の男と関係を持っていたらしく、

その噂を聞いたまわりの人たちから淫売などと罵られ、その子供である京にも

淫売の娘という烙印を押し付け、イジメの標的にされていたらしい。

イジメの内容は物凄く陰湿なものだった。

京の机には陰湿ならくがきで埋め尽くされ、体操服はゴミ箱に捨てられるか隠され、

拳句には当時生き物係だった京が大切にしていた世話をしていた川の魚を

クラスメイトの女子たちが、魚を殺しそれを京のせいにして罵声を浴びせたという。

それを聞いた俺は、どうしようもない怒りに打ち震えた。

しかし、そんなイジメを受けようと京は、ひたすら我慢して耐えていたという。

それを聞いて俺は京の事を「なんて心の強い女の子だろう」と思い、ある種の尊敬を覚えた。

大和

「俺は最初京のいじめに気付いてたのに無視してたんだ。京が苦し

んでいるのに気づいていたのに…。

助けたら、俺や俺の仲間が次の標的にされるのが怖かった」

大和が辛そうな表情でそう言つと涼馬は、

涼馬

「でも椎名を救つた。違うか？」

涼馬の言葉に大和の目から涙が溢れ、

大和

「…違う！ 救われたのは俺のほうだ！ 京を救つた理由は、そんな自分が嫌で、京を助けたのも罪滅ぼしだ！」

涼馬

「でも、理由がどうあれ、椎名を救つたのはお前だ！
その事実是不変わらない…」

涼馬のその言葉を聞き、

ある意味懺悔に近い言葉をずっと今日の今日まで言えず苦しんでいた大和にとって、

涼馬の言葉は今で全て抱え込んでいた物を全て許されたようなそんな気がした。

大和

「ありがとう、その言葉でおれはもう…」

大和の涙はそれから数分後、止まることはなかった。

私は最近、気になる人が一人増えた。

その人の名前は、草？ 涼馬。

私と同じクラスのクラスメイトだ。

自己紹介の時、周りからヒソヒソ声がし、またかとある種のあきらめた感じがあつた私だったが、

一人の男子が、私の代わりにクラスメイト全員にこう言い放った。

涼馬

「それが、椎名自身に関係あるのか？ 親は関係ないだろう。」

と。

大和たち意外で始めて私を私と見てくれた男子。

私はこの草？ 涼馬に興味を抱いた。

涼馬の家は、父親は有名なピアニストだが、かなりの放浪癖があり、家に帰ってくるのがあんまりないという。

帰ってきたら帰ってきたでやかましく騒がしいそうだ。

それを聞いて、理由が違えど親に苦勞させられているという点で、

大和たち以外でよく話をするようになった。

軽い世間話や本の話などを結構話していると楽しかった。

そして気づいた……。

私、この人に惹かれ始めていると…。

たしかに大和が好きだ。

返しきれない恩もある。

しかし、大和を思う気持ちと同じいやそれ以上の気持ちが私の中で育ち始めている。

そしてその気持ちに完全に気づいた出来事が、あれだ。

大和を探しに屋上に向かうと大和と涼馬が話しているのが聞こえた。

私は気付かれないよう気を付け、気配を消し、話を聞いた。

どうやら私と大和の昔の出来事を大和が話しているようだ。

大和

「…違う！ 救われたのは俺のほうだ！ 京を救った理由は、そんな自分が嫌で、京を助けたのも罪滅ぼしだ！」

大和のその言葉を聞いてそうなんだと思ったというより気づいていた。

大和にあれだけ熱烈なアプローチをしているのに受け入れてくれないのは、

何か理由があると思っていたけれど、大和は私に対して負い目を感じてたなんて…

少なからずショックだった。

涼馬

「でも、理由がどうあれ、椎名を救ったのはお前だ！
その事実是不変わらない…」

そんな大和の言葉を聞いた涼馬が、大和に対してそう言った事に私は驚いた。

同情？ 違う、あれは本心でいっている目だ。

涼馬の表情は嘘偽りない真剣なものだった。

私を私としてみてくれる人そして私の大事な人の長年の苦しみを開放してくれた人。

京

「草？ 涼馬」

その名前を言った瞬間、私の心の中が暖かくなった。

今なら言える。

椎名 京は、草？ 涼馬に“恋”してると。

— side out

そして時間が最初に戻り、

京

「涼馬」

京が読んでいた小説を机に置き、潤んだ瞳で涼馬を見ながら、

涼馬

「…なんだ？」

京

「好き、そして付き合おう！」

涼馬

「却下。お友達で」

涼しい顔をして涼馬は京の告白をさらりと断った。

京

「振られた…でも、諦めない！」

振られてもめげない京を見て涼馬は、困った表情をして、

涼馬

「…どうして、こうなった」

それを見ていた大和と冬至はヤレヤレとポーズを取ったのだった。

<

続く>

第1話 『なんの脈絡もなく好きと言われたがさてどうしたものか』（後書き）

作者「とりあえず、京が大和LOVEだった為一番難攻不落だと思っただのであえて一番最初に

涼馬に絡ませようと思いましたが、書いていていつの間にか涼馬LOVEに……」

「大和もあの一件があり、涼馬なら京を任せられると思い、自ら身を引いたという裏設定があります」

「それにしても今回も何人に女の子が、オリ主に惚れるのやら……」

「しかし、今回は、ハーレムは考えておりません。後で投票してもらってから

メインヒロイン決めたいと思います」

「そしてこの話の流れでお気づきと思いますが、原作の1年前からスタートしてますので、

クリスとまゆっちは当分出てきません！ クリス・まゆっちはファンの方ごめんなさい（汗）」

「次回から戦闘シーンがちょこちょこ入ると思います。楽しみに」

では、次回までさよなら～～」

第2話 『とりあえず、かかってこい!』（前書き）

京・大和に続いてあの人たちがでてきます。ヒントは戦闘狂。自由人。犬。筋肉。影薄い。……バレバレですねw

第2話 『とりあえず、かかってこい!』

ガラガラガラ!!!

いきなり教室のドアが開いた。

??

「ここに草? 涼馬というやつはいるか?」

そう言ってきた入ってきたのは、長い黒髪に鋭い眼光のナイスバディな女子生徒だった。

雰囲気からして俺たちよりも1個上くらいか。

その女子生徒に気づいた大和が、

大和

「ね、姉さん!? どうしたの一体?」

姉さん?

「おう、大和。ちょうどいい。草? 涼馬ってやつはどいつだ!」

大和から姉さんと呼ばれた上級生が大和にそう訊ねると

大和

「涼馬ならあそこに…」

そう言って、涼馬がいる席を指差す。

涼馬

「ん？」

そして上級生が、涼馬の所まで来ると品定めをするようにじっくりと涼馬を見た。

涼馬

「…なんか用か。先輩？」

とりあえず、上級生のようなので先輩と呼ぶことにした涼馬。

姉さん？

「…ほう。なかなか面白い気を持っているな。お前とそこにいるお前」

そう言つて、涼馬と冬至を指差した。

涼馬

「…あんた誰だ？」

涼馬は鋭い目付きでその上級生を睨むと上級生は口元に笑みを浮かべ、

姉さん？

「私の名前は川神 百代だ。お前がじじいが呼んだやつか」

涼馬

「（こいつが川神 百代か。なるほどかなりの強い気を持っているな。しかし、かなりムラがあるな）」

ああ、そつだ。俺が草？ 静馬だ」

涼馬が肯定すると百代は目を細め獰猛な笑みを浮かべた。

百代

「涼馬。私と戦え！」

百代がそう言つと、

??

「ちよつと待てい、百代」

教室の入口のほうから声がする。

声の主は、この川神学園の学長兼世界最高峰の武術の総本山川神院
総代【武神】川神 鉄心だった。

百代

「邪魔するな、じじい！」

鉄心

「アホタレ！ この学園でお前たちが戦えば学園が壊れるわい。

試合は、放課後すぐに川神院第1試合場で執り行ふ。それでよい
な百代」

鉄心からそう言われると百代は渋々といった感じで舌打ちし

百代

「チッ！ …仕方ない。わかった」

鉄心

「涼馬もそれで良いかのう？」

鉄心が涼馬に確認すると

涼馬

「問題ない。承知した」

こうして、百代VS涼馬の試合が決定したのだった。

そして放課後、

涼馬は、冬至、京、大和と一緒に川神院へとやってきた。

すると門の前には、何人かの男女が立っていた。

??

「お？　おい、大和、京！」

赤いバンダナをした少年が、大和と京に声を掛けた。

大和

「キャップ、みんな。…キャップたちも試合を見に？」

大和がキャップと呼んだ少年に訊ねると

キャップ

「ああ、そうだ。だって面白そうだろ！」

キャップが笑顔でそう言った。

??

「お、そいつらは誰だ？」

京

「モモ先輩の今日の試合相手の草？ 涼馬。私の将来の旦那様♪」

涼馬

「…そんな事実はない」

涼馬が冷静に否定する。

京はそれに唇をとんがらせて

京

「チエー」

不満そうな声を上げる。

??

「へえ、その人が大和から京を寝取った」

ひよろつとした影の薄い少年がそう言つと

??

「影薄くないよっ！」

相変わらずナイスツッコミb

??

「嬉しくない！」

影の薄い少年は無視して、

??

「？無視された！！」

涼馬が何とも言えない顔をし、

涼馬

「寝取つてもないし、そう言う事実はない」

と冷静に否定する。

??

「その人はわかったとして、その隣の人はず？」

茶色いポニーテールをした少女が首をかしげてそう聞くと

冬至

「氷室 冬至です。涼馬の付き添いみたいなものです。よろしく」
(ニコッ)

微笑みながらそう言った。

キャップ

「なら、俺たちも自己紹介だぜ！俺の名前は風間 翔一よろしくな！」

ガクト

「島津 岳人だ。京と大和のダチなら俺たちのダチだ、よろしくな

「！」

ワン子

「川神 一子。よろしくね！」

モロ

「師岡 卓也。よ、よろしく……」

キャップたちの自己紹介が終わると

涼馬

「改めて、草？ 涼馬だ。よろしく頼む」

そういつて頭を下げる。それを見ていたキャップが、

キャップ

「なんか武士って感じだな。お前面白いな！ 気に入ったぜ！」

モロ

「たしかに武士って感じがしたね」

ガクト

「まあ、俺様ほどじゃないがな」

ワン子

「ガクトと比べる方が可哀想でしょう、涼馬君が！」

ガクト

「そっちかよ！」

風間ファミリーの面々を見ていた涼馬と冬至は、

涼馬

「面白い奴らだな」

冬至

「そつだね」

二人がそう呟くと門の内側から

百代

「何そこでしゃべってるんだ？ 早く試合始めよう！」

そう言いながら百代が出てきた。

涼馬

「…じゃ、行くか」

涼馬がそう言うと全員頷き、川神院の中に入った。

百代に案内され、立派な試合場にやってきた涼馬達。

鉄心

「おおつ、来たか。でははじめるとしようかのう、両者中央にほれ」

百代と涼馬は、試合場中央で相手を正面に見て相対する。

鉄心

「それでは、東方！ 川神 百代！」

百代

「ああ！」

鉄心

「西方！ 草？ 涼馬

！」

涼馬

「おう！」

鉄心

「それでは、（一呼吸置いて）はじめい！」

バシイイイイン

！！！！

試合の合図と同時に両者の拳がぶつかり合う。

ギリッー ギリッー

百代

「ほう、少しは楽しめそうだ」

そう言うとき百代は、一旦後方に下がり、

百代

「ハアアア……！！！！ 川神流・致死蚩う！！！！！」

百代の手のひらから無数の気弾が涼馬に向かって放たれる。

バシュー！ バシュー！ バシュー！ ——！

涼馬

「それなら、ふうー」

涼馬は、特殊な呼吸法により、体内で気を練り上げ、「天」の神気を左手に集め、そして

涼馬

「神飛連弾！！」

無数のソフトボールくらいの気弾を生み出し、百代の致死量にそれをぶつけ、相殺していった。

百代

「そいつは囧だ！ 左腕もらうぞ！ 川神流・炙り肉！！」

いつの間にか涼馬に接近していた百代の右手が、人の温度じゃありえない程の熱量を帯びて

涼馬の左腕を持った。

百代

「貰った！ —— 何っ！！」

しかし、涼馬の左腕も負けず劣らずかなりありえない熱量を持っていた為、炙り肉が効かない。

涼馬

「炎熱の籠手！」

涼馬は予め「炎」の神気を体内で練っておき、左腕にその神気を纏わせていた。

涼馬

「次はこっちから行くぞ！」

そう言つて、百代が掴んでいる右手を払いのけ、拳を構え、

涼馬

「紅い牙！！！」

ボクシングのアップパーカットをするような動作を取り、灼熱の衝撃波を出した。

百代

「くっ！！！！」

涼馬の攻撃に百代は後方に引き下がらされた。

百代

「面白い、面白いぞ！ 草？ 涼馬！ 久しぶりに本気で戦えるやつが現れた。」

さあ、もっと楽しませてくれ！」

百代の顔は、自分と戦える者と出会えた事でかなり嬉しいのだろう。

満面の笑みでそう言った。

涼馬

「…俺は、あんたを楽しませる為に戦ってる訳じゃないが、……まあいい」

そう言つて、左手を返しクイクイと百代を挑発する。

百代

「ほう、そこで挑発か？ 私も舐められたものだな！いいだろう、後で謝つても戦いを止めてやらんぞ！」

挑発されて相当頭にきたようだ。

涼馬はそれをみて不敵に笑い、一言こつ言つた。

涼馬

「さあ、遊びの時間は終わりだ。…とりあえず、本気でかかってこい！」

<続く>

第2話 『とりあえず、かかってこい!』（後書き）

作者「という事で、この作品最初のバトルはもちろん百代戦からスタートです」

「作者は百代が大好きです。欲望に忠実なところとか…」

「次回で、百代との戦いに決着が付きます。お楽しみに」

「それでは次回、またお会いしましょう、さよなら」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3257ba/>

リアルバウトハイスクールin川神

2012年1月9日21時26分発行